

伊勢物語と業平



業平画像 奈良・不退寺蔵

伊勢物語は、一貫した説話ではなく、個々の短い説話を集めたものであるが、その各項の冒頭は「昔男ありけり」の文句で始まり、その昔男の元服から、東国遊歴、恋愛、臨終へとなって、全体としては「昔男」の一代の物語のように構成されている。この「昔男」の名は明らかにされていないが、その男の歌の殆んどが在原業平の作であるところから業平であるとされている。業平は、平城天皇の孫阿保親王の第五子、母は桓武天皇の皇女伊登内親王であるが臣籍に降り在原の姓を賜わった。しかし彼は、社会的な地位にはめぐまれず、相模美濃の権守で終り、むしろ伝説的美男の歌人として宮廷の女性たちを悩殺し、色好みの浮名をのこしたのである。このような業平の恋物語の事実と、小説化とのいりまじった説話集が伊勢物語である。その説話の一つに、

昔、五条の後の西の対屋に住む女性のもとへ、その女性を思う心の深い男が通っていたところが、正月の十日ごろにその女性はよそへ姿を隠してしまった。行先は聞き知ることが出来たが、通うことの出来ないところであつたので、ひとしをつらく思いながら日を過していた。翌年の正月、梅の花盛りに、男は去年のことがなつかしくて、西の対屋へ行ってみた。しかし去年とはうって変り、住む人もなく荒れた板敷に、ただ一人月の傾くまで泣き伏した。

月やあらぬ春や昔のはるならぬ我が身一つはもとの身にして

万感の想いを歌にこめて、夜のほのぼのと明ける頃に泣く泣く帰っていた。これは業平の悲恋の実話である。この女性は、清和天皇の女御として入内を予定されている二條后であり、業平はこの道ならぬ恋のために東国へ下らねばならなくなったともいわれている。

業平の歌は、表現の技巧よりも想いのままの情熱の歌である。その歌の抒情と、簡古な文章で展開される物語は、そこに多情で多感な貴公子の姿を彷彿とさせ、遠い王朝のみやびの世界へと読者をいざなうのである。

季刊 美のたより No.11

昭和44年10月1日

発行 大和文華館